映画評

２０１８レビュー

私的な素敵なシネマ２０１８

井上静夫　同人誌主宰

２０１８年の映画界は、邦画では「カメ止め」という流行語まで生んだ『カメラを止めるな』に、洋画は『ボヘミアン・ラプソディー』に尽きると言っても差し支えない。加えて『カメラを止めるな』はインディーズ映画であり、『ボヘミアン・ラプソディー』はロックバンドのクィーンを描いた映画であり、異例の結果になった。

共通しているのは、両作品とも上映中映画館の会場が大いに盛り上がったことと、リピーターが続出したことである。観客がスクリーンに向かって拍手したり、爆笑したり、果ては一緒に歌ったり（「応援上映」というらしい）、近年にはめずらしい現象が起きたのである。

ワタクシ的には、ミニシアターでしか上映機会のないマイナーな作品が予想外にヒットしたことがうれしい。

それらも含めて、いつものように２０１８年に観た映画を総括するとともに、私的なお気に入り作品についてご案内してみようと思う。

（洋画）

①『祈り』（ランギス・アブラゼ　ジョージア）
②『長江――愛の詩』（ヤン・チャオ　中）
③『大人のためのグリム童話――手をなくした少女』（セバスチャン・ローデンバック　仏）
④『アランフェスの麗しき日々』（ヴィム・ベンダース　独）
⑤『心と体と』（イルディコ・エニェディー　ハンガリー）
⑥『希望のかなた』（アキ・カウリスマキ　フィンランド）
⑦『苦い銭』（ワン・ビン　中）
⑧『大英博物館プレゼンツ　北斎』（パトリシア・ウィートレイ　英）
⑨『犬ヶ島』（ウェス・アンダーソン　米・独）
⑩『人間機械』（ラーフル・ジャイン　印・独・フィンランド）

（邦画）

①『泳ぎすぎた夜』（五十嵐耕平　ダニエル・マニヴェル）

②『教誨師』（佐向大）
③『カメラを止めるな』（上田慎一郎）
④『銃』（武正晴）
⑤『きみの鳥はうたえる』（三宅唱）
⑥『榎田貿易堂』（飯塚健）
⑦『菊とギロチン』（瀬々敬久）
⑧『スティルライフオブメモリーズ』（矢崎仁司）
⑨『鈴木家の嘘』（野尻克己）
⑩『万引き家族』（是枝裕和）

注　カッコ内は監督名と制作国（洋画のみ）

洋画ではこの他、『静寂を求めて』『二重螺旋の恋人』『ガンジスに還る』『悲しみにこんにちは』『母という名の女』『わたしは、幸福』などがあげられる。邦画もこの他、『日々是好日』『Vision』『四月の永い夢』『モリのいる場所』などがあげられる。

洋画のお気に入りラインナップを見てみると、今回は10本の作品中、ドラマ系5本、ドキュメンタリー3本、アニメーション2本となっていて比較的バランスよく並ぶ結果となった。うれしいかぎりである。映画はドラマばかりではない。ドキュメンタリーやアニメーションにも目を向けて欲しいと願っている。

制作国については、相変わらずアメリカ映画の少ないことがさみしい。映画はお金をかければいい作品ができるわけではない。むしろ作家性を押し出した作品にこそ魅力を感じられるのだ。今回のラインナップでは、ジョージアやハンガリーという国に個性豊かな作品がみられたことが特筆すべきことだろう。

邦画のラインナップは、正直今回は難しい選択となった。お気に入り度が拮抗しているのだ。突出した作品がないかわりに、どれも同じくらい魅力的なのである。ただ、ドキュメンタリーとアニメーションに目を引く作品がなかったのがとても残念だった。特に劇場公開されるアニメーションの本数は多いのにお気に入りとなる作品がなかったのが気になる。そして注目の『カメラを止めるな』とカンヌのパルムドール賞授賞の『万引き家族』も２０１８年の収穫として取り上げておかなければならないだろう。

さらには２０１８年のこの年、ラインナップ作品にも出演している大杉漣と樹木希林という稀有な俳優を失ったことが惜しまれてならない。名バイプレイヤーとしてもっといろ

いろな作品で楽しませてほしかった。

個々の作品に移ろう。洋画は、まず『祈り』である。日本ではあまり知られていない巨匠ランギス・アブラゼのトリロジー「祈り3部作」。3作品ともあげたいところだが、ここでは代表して『祈り』を取り上げる。製作からなんと51年ぶりに日本公開されたジョージア映画。壮大なスケールで幻想的に描くこの作品は、宗教、民族、因習を盛り込みながら展開し、アートとして昇華されていた。壮大、幻想とくれば『長江――愛の詩』も負けてはいない。悠久の長江を舞台に、抒情に満ちた深い映像美はいつまでも余韻を残す作品となった。アート、映像美は実写映像だけではない。『大人のためのグリム童話――手をなくした少女』は作家性の強い特異なスタイルを持った実験的アニメーションだ。広い余白と東洋的な筆絵のタッチが、曖昧で流動的な絵柄と相まって、新たなアニメーションの可能性を示唆する。同じアニメーションでも『犬ヶ島』はストップアニメーションという手法を使って黒澤映画にオマージュを捧げる作品で、日本への思いに満ち溢れていた。

とりとめのない会話が詩的で比喩的、舞台劇のような『アランフェスの麗しき日々』。相変わらず弱者に寄り添うように描き、小津調健在の『希望のかなた』。どちらも定評ある監督作品で期待通りの映画に仕上がっていた。

ドキュメンタリーの2本は奇しくもアパレル業界の労働者を捉える作品だった。『苦い銭』は上映時間の長さの分だけ労働・作業の単調さを追体験させるものであったし、『人間機械』は工場内で機械と化した労働者を光と色彩の美しい映像で観察するように撮っていた。

巧みな演出と展開、映像のセンスが光る『心と体と』は、どこか寓話的でありながらしっかりと現実も見つめる作品。ディテールが繊細でユーモアもあり、好感度が高い。

邦画は横一直線だった。『泳ぎすぎた夜』は見過ごしてしまうほど小さな、しかし奇跡的ともいえる映画である。幼い少年のささやかな冒険を描いて、何も起こらないのに多くのことを語る豊饒な作品になっている。

『教誨師』は大杉漣最後の主演映画というだけでなく、ほぼ会話のみで観客に揺さぶりをかける衝撃作。死刑囚を通して問題提起する重厚な人間ドラマであり、役者たちのすさまじい演技に圧倒される。同じく会話で成立する『榎田貿易堂』は、その反対にゆるい映画で、ユーモアと人生の妙味をさりげなく盛り込んでいる。

往年の映画を彷彿させる『銃』は、銃を手にした男のしだいに変貌する心理を映像に結実させ、中村文則原作小説の空気感をうまく表現している。その意味では『きみの鳥はうたえる』も同じだ。モラトリアムな若者の鬱屈した心理を、ふわふわと定まらない日常を描くことで佐藤泰志の小説世界を掬い取ろうとする、映画らしい映画だった。

どこか居心地の悪い映画ではあるが、同時に出演者全員の役回りの気持ちのわかる『鈴木家の嘘』と、是枝監督の一連の映画同様、世界に日本社会の暗部を見せつけた『万引き家族』、どちらもいわゆる家族映画として位置づけられる作品と言っていいだろう。

関東大震災後という時代設定ながら3・11以後の日本社会に呼応する『菊とギロチン』は、自由を求めて戦う女力士とアナキストたちとの化学反応をエネルギッシュに描き、パワーを感じさせるものだった。

最後に『カメラを止めるな』にも触れておかねばならない。賛否両論かまびすしいが、インディーズ映画ならではのキッチュ感は否めないものの、幾重にも仕組まれた伏線とその回収によりエンタテインメントとしての面白さが際立っていて、同時に映画愛にあふれた作品である……と個人的には評価している。

以上が２０１８年の映画であるが、改めてラインナップを眺めてみると、やはり偏向していると言わざるをえない。この「私的な素敵なシネマ」は、タイトルどおりその年に観た映画（劇場初公開作品）の中からワタクシ的にお気に入りとなった映画を選定するもので、いわゆるベストテンではないからである。ベストテンなら入る優れた作品も私的にお気に入り度合いが薄ければ選ばれないことになる。

であるが、今後も、世間の評判はムシして私的に素敵な映画を皆さんにご紹介したいと勝手に思っている。

２０１８年アブない映画

村上　暁　スタッフ

昨年の前半は、なぜかアブない映画によく出会いました。大きな声で、「この映画好きです！」なんて言うと人間性を疑われそうなものばかりだけど、やっぱり好きです。映画で不快な思いをするのはまっぴらごめんという方は、見ないほうがいいかも。

それでは、３本の素敵な映画をご紹介します。

『６８キル』　アメリカ　トレント・ハーガ監督

伏見ミリオン座で、１週間だけ上映。気弱な男が、超ドＳな彼女に引っ張られて強盗をするところから、大変な目に合います。

この映画鑑賞のきっかけは、衝撃的なチラシを見たことから。鬼のような女の顔と、変なＴシャツの男。裏面には「愛と裏切りとバイオレンス満載」という煽り文句。

出てくるキャラが、サイテーでサイコー。超ドＳ彼女は、行為中にノッてくると、男の顔をビンタ＆首絞め。逃亡中に寄るガソリンスタンドでは、ゴスロリ死人メイク女（超凶暴）と、ク●ニ強制女のおもてなし。他にも、娼婦との行為をビデオ撮影して、ズリネタにする金持ち男、少女を切り刻んでホルマリン漬けにするのが趣味なサイコマンなど、この原稿に表現するのも嫌になるような連中ばかり。主役の男の情けない顔に、心底同情したくなります。

全編を通して、バイオレンス、裏切り、下品な会話が楽しめます。

『ＲＡＷ　少女のめざめ』

フランス　ベルギー　ジュリア・デュクルノー監督

ベジタリアンの家庭で育った少女が、初めて生肉を食べたところから、自分の本性が明らかに。**肉食系**女子へ、華麗に変身します。

序盤は、姉妹の立ちション、トイレでおしゃれをする変な日本人、バター犬の受難など、思わず笑ってしまうシーンばかりですが、中盤あたりからは、嫌な予感しかしなくなります。特に、主人公の少女が、初めて男性とベッドインするシーンなんかは、男としては縮み上がるような恐怖に包まれます。ヒロインとの濡れ場がこんなに恐ろしい映画は、史上初めてではないでしょうか。

少女の恋はほろ苦い結末を迎えますが、ラストシーンでは驚きの事実が明らかになります。ここまでの展開とは無縁に思える、「愛の尊さ」を感じます。

きついシーンが多いけど、時々笑ってしまう場面、感動の場面もあり、油断ができません。頑張って最後まで見ましょう。

『ゆれる人魚』

ポーランド　アグニェシュカ・スモチンスカ監督

いわゆる人魚姫物語です。しかもミュージカル。メルヘンチックなタイトルと、ミュージカルという組み合わせの印象で、美しくて楽しいファンタジーと思っていると、大変なことになります。『ＲＡＷ　少女のめざめ』と同じく、人肉食がテーマ。

この映画も、チラシが強烈です。風呂の中に入っている人魚の姿。美しいのか、醜いのか、なんとも言えない不思議な姿。風呂の外にある猫の絵は、大林監督の『ハウス』に出てきた絵でしょうか。

人魚の姉妹が登場しますが、そのデザインが素晴らしい。まるでバービー人形のような人間態、尾が上半身の三倍くらいある人魚態。スクリーンいっぱいに映し出される美しい裸体に魅了されますが、実はこの人魚たちは、人間を食べます。近づくのは、とても危険。

人魚の姉が人間の男に恋するところから、悲劇が始まるのは、人魚姫物語のお約束。たとえ声が出なくなっても、人間になりたい。

童話なんかだと、魔女の薬で人間になったりしますが、こ

の映画は手術で人間になろうとします。この手術シーンがすごい。こんな大雑把な手術は、見たことがありません。お医者さんは途中で踊ってるし。

手術シーンから後は、怒涛の展開。驚きのラストまで、一気に突っ走ります。

この映画のアグニェシュカ・スモチンスカ監督も、『RAW　少女のめざめ』のジュリア・デュクルノー監督も、ともに女性です。血で口を真っ赤にしたヒロインが、とても美しく見えるのは、女性監督ならではの美意識が映像に焼き付けられているからでしょう。

この二人は、長編デビュー作とのこと。いやはや、世界にはたくさん天才がいるんだなと感心。日本の草食系男子には太刀打ちできませんな。